編集後記

アヴニール労務事務所　所長 柿野元博
電話　（06）7172−0165
E-Mail　avenir4you@gmail.com
〒561-0884 大阪府豊中市岡町北 1-7-9

暑くなったこの時期、野球少年を見かけることが増えました。
今は「玉子」型の体型の私も、以前は６年程、少年野球のコーチをしていました。今回はそんなコーチ時代の話です。
少年野球の試合でも、ベンチから選手達にサインを出すことがあります。
もっとも低学年の時は、「盗塁」、「バント」、「待て（打つな）」、「打て！」程度の簡単なもの。
ある時、３年生以下のチビッコチームが、サインを教えてもらって初めて対外試合をしました。
接戦の終盤、１点を追って攻める我がチームは、２アウト満塁の逆転の好機。しかも相手投手は動揺してストライクが入らず、ボールが３つ先行。あとボール一つで押し出し。つまり労せず同点に追いつけるのです。
当然のように監督のサインは、「待て」。ところが、投手がセットポジションに入ったときです。
両チームのベンチの目が点になる想定外の事態が起きました。(◎_◎;)！？

わが１塁ランナーの盗塁です。なんと！果敢（？）にも２塁に向かってスタートしたのです。
相手ピッチャーは、ビックリしながらも、とりあえず、２塁にボールを投げました。
ところがビックリしたのは、相手投手だけではありません。
それはわが味方チームの、日頃から気の弱―い２塁ランナーです。　(￣д￣;)
２塁ランナーは、自分の方に猛然と走ってくる味方の１塁ランナーに気圧されて、なんと逃げるように３塁に向かってスタートを切りました。すると、今度は１塁ランナーをアウトにしようとした２塁手が慌てました。
そうです、先の塁でアウトにするのが野球の鉄則。迷いながらも慌てて３塁にボールを投げたのです。
しかし慌てたのは、その２塁手だけではありません。
はい。お察しの通り、わがチームの３塁ランナーです。　(T_T)

２塁ランナーが、必死の形相で自分のいる３塁に向かって突っ込んできます。
無我夢中とはまさにこのこと。頭が真っ白になった３塁ランナーは、本塁に向かって突進しました。
２塁手からボールを受け取った相手の３塁手は、自分のすぐ近くまで走ってきているランナーを気にしつつ同点を阻止しようと本塁に送球。　・・・・・そして、それが暴投となりました。　(+_+)
お互いのベンチや応援席から、怒号や悲鳴、そして笑い声が混じる大声が飛び交う中、結局２点が入って逆転・・。
相手はもちろん味方までもパニックに陥れる、想定外（！？）の１塁ランナーの走塁でした。
ベンチに帰ってから、原因を作った１塁ランナーが怒られたことはいうまでもありませんが、今となっては、コーチ時代の楽しい（？）思い出の一シーンです。

でも、味方（同僚や上司）も混乱させる、「まさか！？」と思わせる想定外の事態は、大人の社会でも、また職場においても起こっています。残念ながら、私どもへの御相談も途切れることがありません。
でもその原因には、組織における意思の疎通、つまりコミュニケーションの不足もあると感じております。
とりわけ上司と部下の関係においては、「報連相」、なかでも中間報連相における相談、質問、確認のプロセスでの思いの共有、目的の共有が足りていない為、トラブルになっているように感じることがあります。
ルールであるサインはあくまで手段。肝心なのはその先の目的であり、そこに思いの共有がなければ、手段に振り回され、また、周りの仲間を振り回してしまう選手になってしまいます。
野球においてキャッチボールは基本といいます。相手の胸に向かってボールを投げ、多少それが逸れたとしても正面でボールを捕り、また相手の胸にボールを投げ返す。
「報連相」はまさに、職場におけるキャッチボールだと思うのです。
ちなみに、問題の１塁ランナーの後日談ですが、その後大阪の高校野球では強豪とされる高校に進学し、１年生からベンチに入る選手となりました。＼(^o^)／

未来は変えられる！ アヴニール労務事務所 avenir